自己肯定感が低下している子供への対応方法 ～苛つきやすい自分を認めたくない A児（ADHD）から学ぶ～



船橋市立船橋小学校教諭（発達障害通級指導教室担当） 大山（おおやま） 恭子（きょうこ）

頭の回転が速く言語力が高いA児は、自分の意にそぐわないことがあると相手を言い負かそうとしたり、教室を飛び出して喚きながら壁や扉を蹴飛ばしたりする様子があった。認められる経験の少ない本児にとっては、A児いわく「論破」は強みでもあったため、言い負かせば自分が優位に立てるという誤学習をしていた。

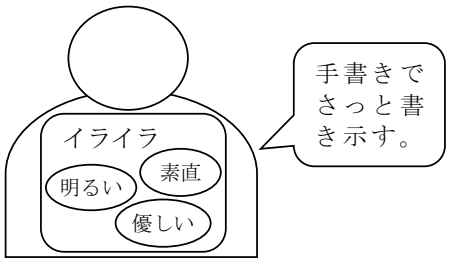
ある日、A児が「苛々するのも自分だ。だから苛々する自分を変えたいとは思わない。」と通級の指導で言い放った。

そこで、A児に次のように話した。「その通りだよ。だから変える必要なんてない。素直で優しい君も、苛々する君もみんなあなた自身なのだからそれで良い。でもね、苛々に支配されないでほしい。」

すると、A児は話に耳を傾け始めた。本当は苛つかずに友達と仲良くしたいと思っているのだが、うまくいかない自分自身を受け入れられない思いがそのような発言につながっていた。

A児とはこのやりとりをきっかけに苛々のコントロールの必要性と対応方法を確認する事ができるようになり、担任や保護者、医療と連携して支援を行えるようになった。そのため、４学年の終わりには苛ついて教室を飛び出したり言い負かそうとしたりする様子が激減し、気持ちが落ちつくと自分から教師に振り返りを求めることもできるようになった。

このように、子供の言葉を字義通りに受け取らず、まずは気持ちに寄り添った対応が大切である。否定的な対応からは反発しか生まれないため、声のトーンを下げて肯定的な姿勢で対応してみる。言葉だけでは本当に伝えたい事が伝わらない事もあるため、合わせて書き示すとやりとりがスムーズになる。



また、トラブル後の振り返りは子供が失敗を繰り返さないために必要である。しかし、通級した時にはすでに解決できていることも多い。振り返りができているのに改めて通級指導の時間で取り上げようとすると、蒸し返されたと思って再び苛々してしまう事があるため、このような場合は、「トラブルがあったんだって…。」と言って切り出し、解決できているようならば「それなら先生は何も言わないよ。」と言って話を終わらせる。一見、なんの対応もしていないように思えるが、子供からは「先生は僕をわかってくれている」という解釈につながり、信頼関係を築く事ができる。

子供の行動には必ず理由がある。

失敗を繰り返している子供は「いつも自分ばかりが怒られる。」「どうせ頑張ってもできない。」といった被害妄想や自己否定的な思考ができあがっている事が多い。

子供の表面的な言動に目を向けるのではなく、子供の行動の理由や真意に目を向けていく教師の姿勢が子供との関係作りにはとても大切であると考える。

そして、理解してくれる大人との出会いは、子供の生活の活力になるものと信じている。